

鷹の目の狩人



楽しいから始まる 城グッズの数々

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原 道晴

仕事中によく「趣味で仕事をしている」といわれた。確かに、仕事も城も半端ではなかった。印刷が好きであった。その魅力に取りつかれ、特に開発という未来を構築する仕事は楽しいの一語であった。全国を飛び回り、空港と工場しか目に入らないハードな日々もあったが、休日は国内でも海外でも早朝でもがむしやりに動いた。

研究の世界も大変なことばかりではない。仕事中もライターのように書き続けていたので、原稿書きや講演会も特に負担にならない。ただ、連日時間に追われ、疲れて倒れるの繰り返しでは身が持たない。今のところ、約2週間で体力が尽きるようだ。その時に頭を空にして、安らぎを与えてくれるのが、たわいもない城グッズだ。古典籍や古絵図のように専門店では入手不可能、でも、全国の骨董店や骨董市にはあふれている。なんでこんなものがあるのかという意外性、不思議の世界である。ぜひ一度、安らぎを求めて骨董市に出かけることをお勧めする。もっとも、見ていると若い人はいないようです。

城研究とコレクション歴 50 余年、当初は学術的な資料、古文書や古絵図ばかりを求めていた。しかし、ロンドンのヒースロー空港で西洋の要塞の実にリアルな陶磁器に出会い感激した。日本でも、日本酒のボトルで天守型のものを見れば集めていた。日本の場合は城郭のシンボルである天守がほとんどであった。要塞の模型は地形から表現されていた。そんな時に、天守のある近世城郭でなく、中世城郭、古城の模型ができる聞き、協力した。出来上がったのは長篠城跡であった。建物も推定復元されていたが、建物パーツを作る前の地形模型も素晴らしかった。いくら城、戦国時代ブームでも採算が取れるのか心配したが、次は高天神城跡とのこと。夢は名護屋城や安土城、躰躰ヶ崎館、天空の城竹田城と膨らむが、これからに期待したい。



名古屋城天守の酒ボトル

模型はまだ研究者としての範疇に入るが、虚無という観点で見ると実にくだらない、楽しいものがいっぱいある。鳥かごが天守



石造りの天守



天守型金網鳥籠



オールドノリタケ名古屋城皿



城のかんざし

の形をしていて、実際、鳥が入る。鳥は飼っていないが、針金と竹製の天守型鳥かごを骨董市で入手した。天守では塗りの重箱四段重ねのものもあり、正月に実用している。細工物では、櫓を付けたかんざしや刀装具の小柄に天守が描かれたものもあった。イメージからかお酒を飲むと思われるため、城の名前の日本酒は多くお土産にいただく。コレクションには実際、天守の形をした大阪城、名古屋城、犬山城のボトルもある。小さいものではマッチラベル、蔵書票、切手に描かれた城、美術品では幕末の合戦絵に城が描かれている。大坂城中大火の図や姫路城築城図は白眉であるが、高松城水攻めは多くの作家が描いている。明治以降では城作家で橋本興家の城版画を片っ端から集めた。飾り皿もオールドノリタケの名古屋城、犬山城、染付の清州城修築、角皿の金鯢、陣屋と書かれた茶碗には笑ってしまった。もちろん、ネクタイやタイピンも城である。古いものでなく、今でも全国の城の売店では、いやと言うほど城グッズにあふれている。松本城売店で城グッズをすべて買い、店員さんにあきれられた。

好きこそものの上手なれと言いますが、趣味で仕事をすれば3倍はできるように思います。

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH